学　校　便　り　　琢磨

第１４号　R2.7.17　三豊市立詫間小学校

１学期最終号

１学期も、後２週間です！

１学期も、後２週間となりました。来週は４連休もあり、１学期に登校するのは８日間だけです。今年は、夏休みが例年の半分もありませんので、「もうすぐ長い夏休みだ！」という実感があまりないかもしれませんね。

学校という場所は、やはり子どもたちがいて活気に満ちあふれるものです。長い休業期間に「１日も早く学校が再開されてほしい。子どもたちと一緒に勉強がしたい。おいしい給食を食べてほしい…。」と強く願っていた詫間小学校の教職員。学習もかなりペースアップして進みました。水泳や陸上練習もできるようになりました。全校での集会や行事は、まだ制限があるものの、段々と日常の学校生活を取り戻しつつあります。

しかし、今、感染の第２波が心配されています。夏休みは、外出する機会や普段は会わない方と接する機会も増えることと思います。以下は、７月１０日に開催された「第２０回新型コロナウイルス対策本部会議」において決定した「県民への協力依頼等」の内容です。８月２０日に、良い２学期のスタートを切るためにも、ご理解・ご協力の程、よろしくお願いいたします。

○　発熱等の症状がある場合は、都道府県をまたぐ移動はもとより、外出を控える。

○　感染防止策が徹底されていない施設等（感染防止対策の実施を示す掲示の有無などを確認）への外出を控える。

○　新しい生活様式の徹底を継続する。（３密の回避、人と人との距離の確保、マスクの着用、手洗いなどの手指衛生をはじめとした基本的な感染対策の継続）

学校閉庁日のお知らせ

夏休み中も、学校は月～金曜日の平日、８：００～１６：３０は開いています。ただし、毎年８月１３日～１５日の３日間は、「学校閉庁日」となります。

この閉庁日において、児童が事故や災害に遭うなど、緊急に連絡を要する場合のみ、三豊市教育委員会学校教育課（７３－３１３１）へご連絡ください。その後、その内容を本校の管理職が受けて対応いたします。なお、今年、三豊市教育委員会学校教育課に連絡できるのは、８月１３日（木）と、１４日（金）の８：３０～１７：１５です。

自治会別児童会　７月１５日

７月１５日（水）の６校時。夏休み前の自治会別児童会が行われました。夏休みの行事等の確認を行い、担当の教員から夏休みの生活で気をつけること等の話を聞いた後、自治会ごとで集団下校をしました。

行事予定の変更

前回の学校便りでお知らせしていました９月以降の行事予定に変更がありますのでお知らせします。

<u>リレー・鼓笛等の公開</u>

~~１０月２３日（金）~~から

１０月２１日（水）へ変更

（幼稚園の行事と重なったため）

香川用水出前講座　７月１６日

７月１６日（木）の２、３、４校時。４年生は、香川用水出前講座がありました。独立行政法人水資源機構の方３名が本校を訪れ、限られた水の大切さや、香川用水の仕組みなどについて教えてくださいました。

真鍋校長の独り言」　その１１

水道の蛇口は決して止めてはいけない！　－その１－

私は高校３年生の３月、とても落ち込んでいました。それは、受験した大学の全てに落ちてしまったからでした。結構、自信があり（今にして思えば自信過剰）、私は第一志望の大阪の大学に行くことができるものと信じ切っていましたし、もし、そこがダメでも、第二志望の東京の大学はきっと大丈夫だろうと思い込んでいたものでしたから、かなりなショックを受けました。その上、友達のほとんどが、大学に合格して、東京や大阪などに出発して行くのを見送っていると、一人だけ取り残されたみじめな気持ちになり、「こんなことなら、もっと必死で勉強しておけばよかった。」と後悔ばかりの毎日でした。

さて、予備校でも探さなければ、もう後が無い、１年後に向けてがんばろうと少しだけ前向きな気持ちに変わった３月３０日。一本の電話がかかってきました。「入学予定者が辞退したので、あなたを補欠合格にします。入学の意思があれば、明日の１４時までに連絡してください。それまでに連絡が無ければ、入学の意思は無いものと判断いたします。」と、まるで機械のように事務的な内容の電話でした。

私は、とても迷いました。それは、その大学が自分の志望する大学ではなく、第一志望の大阪の大学を受験した際に、たまたま近くに試験会場があった山梨県の大学だったからです。それも担任の先生から無理矢理受けておけと言われて、「どうせ暇だから、ついでに受けておくか。」程度の（大変失礼な）気持ちで受験した大学だったのです。

決めるための時間が無いというのは、いいようにも悪いようにも働きます。結局、「もう受験勉強するのも面倒くさいし、この大学に行くか…。東京にも近いし…。」ということで、私は、それから３日後に、香川を発つことになったのです。

当時は、瀬戸大橋はありませんでした。高瀬駅から汽車（電車ではなくディーゼルカー）に乗って高松駅へ、そこから宇高連絡船という船で宇野まで、そこからまた汽車に乗って岡山へ、そして新幹線で東京駅へ。朝７時頃に高瀬駅を出発し、東京駅に着いたのが午後４時前でした。（今なら高瀬駅から東京駅までは４時間～５時間）しかし、そこからが、まだまだ遠かったのです。中央線で終点の高尾に行き、その後、中央本線に乗り換えて大月駅へ、最後に、富士急行線に乗って谷村駅（山梨県都留市）へ。着いたのは、家を出て１２時間後の午後７時頃でした。東京では高層ビルに圧倒されましたが、西に向かうたびに、だんだんと建物は無くなり、電車はどんどんと高い所に向かっていきます。やがて山と川しか見ることができなくなり、着いたのは、都会ではなく、高瀬とあまり変わらない、いや、むしろ高瀬より田舎の町だったのです。その上、４月というのに香川の２月より寒いのです。そこは標高５００～６００ｍくらいの町だったのです。香川で言えば、結構高い山の山頂くらいの所なのです。

私は、この暗い小さな駅の前で、たった一人、周りを見ていました。駅前だというのに真っ暗なのです。やがて涙がこぼれてきました。「この町で、誰一人知っている人がいないこんな所で、これから４年間も暮らしていくのか。」これからの新しい生活に対して、わくわくした気持ちは全くなく、理想としていた大学生活とは真反対の現実を目の当たりにしたからです。

私は、一旦、東京まで戻り、大都会のホテルに泊まり、華やかな街や、大勢の行き交う人を見ながら、３月３０日の安易な選択を後悔していました。

それでも翌日、私はその駅前の小さなアパート（寮みたいな下宿、４畳半の部屋で、トイレ・調理場は共同、風呂無し→近くの銭湯へ、月の家賃８，０００円）に住むことを決めました。そのアパートには、私を含め新入生が３人（鹿児島、岩手、香川出身）と、先輩が３人の６人が住み、共同生活を始めることになったのです。

この町は、とにかく「寒い町」でした。５月、６月、いや７月でも夜はセーターが手放せません。でも、夏はとても涼しいのです。避暑地で有名な山中湖や河口湖にとても近い町なのです。クーラーは、（当時は）一般家庭には必要ありませんでした。真夏でも、窓を開けると、クーラーより涼しい爽やかな風が流れ込んできます。そんな気候の両面に気付いた頃、この田舎の小さな町の良さにも気付き始めていました。

ところが、事件はその年の１２月に起こってしまいました。私は、夜中に目を覚ましてトイレに行ったところ、流しの蛇口から、ちょろちょろと水が流れ出ているのに気付きました。そこは、水不足の香川県人です。しっかりと蛇口を閉めて、これは皆のためにいいことをしたと満足して眠ったのです。

翌朝、流しの辺りで、騒ぐ住人の声で目を覚ましました。そして私が見た光景とは…。（次号につづく）